

會



報

1960年6月

209

日本山岳会

西穂高岳登山技術指導者講習会

日本山岳会では全国的な登山技術の向上と登山界の正常な発展を図り、遭難の絶滅を期すとともに、将来海外登山隊の中核たりうる全国の指導者層を対象に、登山技術講習会を開催することになった。積雪期登山の一般的、専門技術の実技訓練、リーダーとして必要な山の見方、登山の考え方を研鑽することによって高度の登山技術全般について修得することを目的とした。受講者人員、講師人員の關係から全国を三ブロックにわけ昭和三十四年度から三年計画で、実施することになった。

昭和三十四年度(第一年)北海道、青森、岩手、秋田、宮城、山形、福島、新潟、群馬、栃木、茨城、埼玉、千葉、東京、神奈川、昭和三十五年度(第二年)静岡、山梨、長野、岐阜、愛知、三重、富山、滋賀、京都、大阪、奈良、和歌山、兵庫、石川、福井、昭和三十六年度(第三年)岡山、広島、山口、島根、鳥取、香川、徳島、愛媛、高知、福岡、佐賀、長崎、熊本、宮崎、大分、鹿児島

受講者は各都道府県から各二名、各都道府県体育協会に加盟している山岳団体から選出する。満二十才—三十才までの男子、高校生は認めない。何らかの山岳団体に属し、リーダー、またはサブ・リーダーとして現実に積雪期登山を行つてゐるもの。受講者の現住所から集合地までの往復旅費は受講者負担、その他は日本山岳会負担。

第一年度行動概要

三月二十日(薄曇時々晴) 浅間(湯)七・一五(トラック)一中の湯(一〇・三〇—一・三〇)ここより各隊別に上高地に向かい村営ホテル着(一四・〇〇)夕食後一八・〇〇より第一回登山技術座談会、例年にくらべ雪は少く、上高地までスキーは使用せず。

三月二十一日(雨、〇・六〇〇に五度)雨天のため停泊、一三・〇〇—一六・〇〇遭難防止と遭難対策座談会

三月二十二日(晴、〇・六〇〇零下五度)各隊別に村営ホテル出発(〇・七〇〇—〇・七三〇)西穂山荘着(一〇・〇〇—一〇・三〇)積雪少いためスキーは上高地に残し徒歩で登る。西穂山荘附近の積雪約二米半。一二・三〇山荘附近にて講習、始めに山荘前の台地上にテント設営、ミッド六人用、カマボコ五人用各一張り、対人二人用一對とす。その後、稜線西側の急斜面で登降、綱の取扱について、担当者梶本、終つて各隊ごとに制動確保の実習、夕食後第二回登山技術座談会。千葉、北海道、岩手、新潟、栃木の各隊は担当リーダーとともに幕営。

三月二十三日(晴、〇・六〇〇零下七・八度)日高会長下山、各隊次のとおり編成。

西穂高隊、CL金坂(信濃支部井口、二本)梶本(東京I)塚本(北海道)日下田(千葉)石島(新潟)竹田(栃木)山本(秋田)熊谷(岩手)

焼岳隊、CL百瀬(東京II)住

吉(茨城)相沢(宮城)山野井(福島)芳賀(群馬)篠原(山形)徳久(埼玉)

西穂高隊は独標までを前日の実習の復習にあてる。雪が少く、大体において平易なルートであったが基本技術の再検討のためには好適な登山であった。千葉隊に心臓の調子が悪化し頂上直前で引返した者がしたが、他の隊は全員無事登頂。焼岳隊はちよつとした長丁場なので疲労者を生じ、予定より帰着が遅れた。中尾峠より綱をつけて確保やアイゼンの使い方について実習する。夕食後一八・〇〇海外登山について講義、本日青森、宮城、埼玉、茨城、東京が幕営。

三月二十四日(風雪、〇・六〇〇零下八度)天候悪く行動中止、朝の体操後〇・八〇より山荘附近の斜面において雪崩発生の原理および危険度の判定方法について実習、担当金坂、ひきつづき稜線を独標の方に登り風速および気温の測定(15 m/s、14°C)雪庇生成の観察を行う。一〇・〇〇—一三・〇〇雪崩の講義、担当金坂一三・〇〇より反省会司会日下田、夕食後自由懇談。

三月二十五日(晴、〇・六〇〇零下五度)山荘出発(〇・七〇〇)一中の湯(十二・〇〇)各隊ごと下山、十二・一〇より閉会式、金坂CL高山支部長、安曇村長代理より挨拶、再び自衛隊の好意によるトラックに分乗、一五・四〇松本駅前解散。

◎参加者(講師) 日高信六郎、金坂一郎、百瀬孝、梶本徳次郎、住吉仙也、塚本茂樹、日下田実、石島豊二、相沢裕文、徳久球雄、

講評 金坂 一郎

幸いにして参加諸氏の御協力により本講習の主要目標を達成することが出来た。本講習会は単なる授業の切り売りではなく、一つの有機的な山行を通じて、登山というものを具体的に把握しようという試みであることは開会式の挨拶においても述べたとおりであるが、本講習会を通じて不愉快な空気を露ほども感ぜず、終始気分の良い登山であったこと、これが最大の収穫であったように思う。すべての参加者は、ここから新しい登山が発展してゆくことを期待したいと思う。

積雪期登山技術の講習課目として挙げられる主なものは、スキー

術は別として、雪崩対策を含めたルート・ファインディングと高所露営くらいのものである。実はこれだけでも入下山を含めての一周間という短期間では手も足も出ないというのが現実である。だから一つの考え方を示して、それから先の問題は参加者がそれぞれ独自に発展させてゆくより仕方がないのである。十分な日時をかけて、ひと通りのことはやりたいとは誰しも願うことであるが、時間的にも資金的にも一応許される限度がこのくらいのものであるとすれば、こうした変則的な講習会も止むを得なかったのである。幸いにして参加者が各県を代表する指導者級の人たちであつたから、こういう一を教えて十を自学自習していただく式の講習会が出来たのであるが、この行き方は決して一般講習会の見本としてはならないことは講習中にもくわしく申し上げたとおりである。参加者が故郷に帰られてから、これをそのまま真似されることは極めて危険である。新人に対しては、この講習内容を何倍にも引き伸ばして十分な日数をかけて伝達する必要がある。ここに重ねて御注意申し上げたい。

参加者の基本についての関心は、はつきり申し上げると低調であつたように見受けられる。例えば雪崩の講義に入る前に雪崩について従来から持っていた疑問やその他の意見を求めたところ、全く反応がみられなかった。もとより日本の識識から発言を遠慮されたような方も見受けられたが、真剣に討論すべきときに無言で終始したということは、無関心の度を示すものと判断されても止むを得ないのではなからうか。

これに反して筋肉的なテクニックの問題に入ると、これを具体的にくわしく、また時間をかけて指導してほしいという声が強いのである。ところがこうした問題の大部分は、冬山以前に夏の雪渓なり、岩場なりでするにマスターされていなければならないことなのである。積雪期独得の問題といえ、例えば確保についていえば、不安定なサラサラ雪の上における足場の強さとか、案外脆くも折れてしまうピッケルのシャフトに力がかかるコツといったこと、あるいは雪庇地帯の綱のさばき方といった応用問題だけであつて、スリッパそのものを止める方法などは冬山以前に完全に修得しているべきである。しかし受講者の求めたものは、積雪期特有の応用問題よりもむしろ、それ以前の初歩的技術一般についてであつた。こうしたことは積雪期登山技術講習会の問題ではないのであるから、出来れば一度夏山において雪渓技術だけはかなりの程度に修得出来る講習会を(正味一週間要するであろう)行つておき、その参加者の中から積雪期講習会参加者を選ぶよう、今後の課題として残したい。

受講者はすべて真面目な態度で講習に参加した。これは山行を愉快に遂行する大きな力となつたのであるが、受講者の技術は必ずしも各県そろつていたとはいえない。北アルプス的な技術については初心者に近い人も参加していたが、これはホーム・グラウンドの

関係から止むを得ないことであらう。ヒマラヤ登山などを目標にするときは、これではとても話にならないが、日本の一般の山を登る限り、こうしたことは自体は大問題ではない。登山全般に通じる一般原則をよくつかんでいのかどうか問題なのである。

参加者のほとんどが故郷の山々に輝いた記録を残してきた人たちではあるが、基本的な問題になると、考え方が、技術面でも、案外おろそかにすてきた人が少なくないようだ、体力が十分強い間はゴマカシがきく、しかしそれだからといって問題が解決されたわけではない。そんな状態では危険に対する考え方が甘くなるとはさけられない。それだからといって、私はここで重箱のすみをつつような足の動かし方の上手、下手を論じるのではない。大局的にみて、どのようなところに危険がひそんでいるか個々の悪場の技術的処理ではなく、一日の行動なり、数日の山行について作戦的な大局の見通しをつけることは斜面的峻しさに関係なく、リーダーとして最も大切な点である。

僅か数キロの行程の焼岳往復において、かなりへたばつた人があつた。これは昼飯の乾パンが少かつたせいではあるまいかと論じた人があるが、問題は量よりもむしろ食べ方にあるようだ。一日の行動時間を見積をし、これに応じた食べ方をすれば、あの量だけ食べれば腹がへつて目がまわるといったことはないはずである。しかも西穂小屋から焼岳往復をいったコースは積雪期登山でいえば入門であ

る。あの好天氣に恵まれて、これを十分にこなせなかつた人があることは問題であらう。筋肉的な技術の面だけから考えて平易な山と片づけ研究もしないで、また頭も使わないで、ただ歩きまわつてきて、くたびれましたでは困るのである。出発前に地図を出し、距離と登降の標高差を計算するとか、雪質の変化を推測しただけで、かなりの体力配分の考え方ができるはずであるが、この程度の予備調査をした人が何人あるだろうか。西穂登頂班にしても同じようなことがいえる。距離が近く、天氣がよく、峻しいところもあまりないルートであるから、問題は別におこりはしなかつたが、もし独標到着までに確保の基礎練習をしなかつたとしたら、確保のシヨックがたつたらいの強さで、これをどうさばいたらいいのかも知らずにアンザイレンしていた人も何人かあるはずである。もしこんな、状態で人を連れて歩いたとしたら、真面目に考えてみればこれは大変な不謹慎であらう。

また下山に際し、氷化して傾いたステップを重荷を負つてへつぱり腰で踏んでいた人がほとんどである。こうした足場の修正はピッケルのひと振りだけで片づくことなのであるが、何のためのピッケル携行であろうかこれは恐らくアイゼンに頼りすぎた登山術の欠陥のひとつの現われではあるまいか。問題をとらなければいくらでもある。しかしこうしたことはいちいち指摘するまでもないことで基本的な観点に立つてみれば、誰でも容易に理解出来ることであ

る。お世辞めきに、最近の登山者の登攀能力は目まじしい。しかしその登攀能力に比較して危険に対する顧慮は昔とくらべてあまり進んでいないようだ。だからかなり登攀能力のある人の遭難の中に、十年一日の如く、初心者のような遭難が見られるのである。全般のレベルが上つたとしたら遭難の種類も高級になつてゆくはずである。それがそうでならないところをみると、頭でつかへつたばかりの生長をしている登山者が多いと判断される。こうした点今回の参加者もそれぞれに自己批判されたい。

最後に新聞批判に少しふれておこう。ある新聞には、今回の講習会には、ヒマラヤ登山のような高度の問題に重点がおかれ、遭難対策については力がそがれ、遭難対策というふうな記事が出た。今回の参加者の中には、こんなそつかしい見方をする人はあるまいと思われるが、一応弁明しておこう。海外登山については、私が一度講義をしただけである。その他の実習、講義はすべて登山技術の基礎的な問題だけである。それがそのまゝ遭難の予防に通じる道である。遭難対策とは負傷者の運搬訓練だけではない。遭難をしないように登山の基礎をよく勉強することが大切なのである。世間の人はどう考えられるかよく知らないが、ヒマラヤのような大きな山に登ろうとして真剣に勉強するために、登山の基礎を徹底的に反省する必要がある、これがそのまゝ遭難予防にも通じる道であると考え

北方ルートからの エヴェレスト登頂

山崎 安治

一九六〇年ブレ・モンスーンのヒマラヤ登山隊はそれぞれ輝しい業績をあげ、ヒマラヤ登山史上に一つのエポックを画した。

この中で最も大きなニュースは中共登山隊による北側からのヴェレスト（八八四〇米）初登頂であった。ニューズウィーク誌はチュリツヒ駐在の中共エイジエントが登山に用いる数百本の携帯用酸素シリンダーと登山用具をスイス・アルパイン・ソサィティから購入したと、中共隊によるエヴェレスト登山の計画を早くから伝えていた。

中共隊は隊長史占春氏、副隊長許競氏（いずれもスポーツ健将）以下で編成され、三月十九日エヴェレスト山麓に到着、高度順化を行いつつBC（五一二〇米）、CI（五四〇〇米）、CII（五九〇〇米）、CIII（六四〇〇米）、と天幕を進め、CIVをノース・コルセの標高からみて、多分戦前のイギリス隊がつた東ロンブク氷河よりノース・コルに取付いたものであろう。さらにCV（七六〇〇米）C VI（八一〇〇米）、C VII（八三〇〇米）と天幕を建設、五月十七日から最後の頂上攻撃に移り、五月二十四日八五〇〇米のC VIIIを王富洲、屈銀華、劉連満の三人のスポーツ健将および一般運動員の貢布（チベット人）の四名が午前九

時（北京時間）出発、東北山稜をつたひ第二ステップの岩場は屈銀華がトップとなり靴をぬぎ、靴下で登り切るといふ冒険を行い、八七〇〇米の地点で劉連満が疲労のためとどまつたが、残りの三人はさらに登攀を続行、八八三〇米で酸素が切れたが強引に頂上を目指し、五月二十五日午前四時二十分（北京時間、現地時間午前一時ごろ）北面からのエヴェレスト登頂に成功した。約十九時間に近い苦闘の後ついに戦前英国隊が何度か試みてならなかつたルートから頂上に達したのである。「王富洲、屈銀華の手足はもう凍傷になつていた。貢布が背のうから五星紅旗と白い小さな石膏像をとり出し、これを頂上の北西にあつた岩の上に置きしつかりとめた。王富洲が手さぐりで日記をとり出し、シャープペンシルで書いた。

王富洲三人がチオモルンマを征服、一九六〇年五月二十五日四時二十分。

暗いため撮影カメラはもつていたが、頂上の情景はとれなかつた」と新華社電は伝えている。五月三十日元気にベース・キャンプに下山した。

中共隊の成功の原因は何といつてもその粘り強さによるものであろうが、戦術的には酸素の大量の使用、ラスト・キャンプを八五〇〇米の最高所に建設したこと、（一九三三年の英国隊のラスト・キャンプは八三三〇米）さらに五月上旬史隊長、王鳳相隊長による八六〇〇米まで達した登頂ルートの偵察（八五一九米の地点で雪洞に一夜を明している）などがあげ

られよう。八五〇〇米のラスト・キャンプといえ、第二ステップの直下である（第二ステップの基部は標高二八四〇呎約八五五〇米）、ここより頂上までの水平距離は一キロ足らず、標高差約三百米、これに十九時間を要したその登攀のすさまじさが想像される。

一九三三年の英国隊で、ウインハリスとウエージャの二人は第二ステップについて、二八〇〇『呎の高所でのようなところを登るのは最後の手段としてでなければ企てるべきでないとしてイエローバンドヘトラバースしてしまつており、その困難な岩稜をつたつて登頂した中共隊の実力は高く評価すべきものであろう。

なお中共隊が五九〇〇米附近で英国人らしい死体を発見したとの報に対し、一九二四年頂上附近で前方不明となつたマール・カアヴィン（の死体ではないかと）が、東ロンブク氷河上で発見されたものとすれば、ジョン・ハント氏のいつてゐるとおり、それは一九三四年単独登攀を企てて行方不明となつたモリス・ウィルソンのものであろう。ただし西側のロンブク主流で発見されたとしたら話はちがつてくる。

今回の中共隊は隊長、副隊長、登頂隊員いずれも昨年パミールの巨峰ムスタグ・アタ（七五四六米）登頂に参加しており、隊長史占春は国家体育委員会登山処長で三十二才。副隊長許競も同じく三十二才で職員。王富洲は二十五才、大学生。屈銀華は二十六才、四川省の林業労働者。貢布は二十七才、職業は兵士である。一九五五

年ソ連の指導ではじめられた中共の登山界が、僅か五年のうちに北面からのエヴェレスト登頂という大きな業績をのこしたことは驚嘆に値している。

中共隊と相呼応して南側からエ峰登頂を目論んだギャン・シン代将を隊長とする隊員二十名、シェルパ五十五名という大がかりな印度隊は五月二十五日頂上直下八六〇〇米の地点にC VIIを設け頂上を目指したが猛吹雪で酸素吸入器が凍結したため後退、第二回の企ても強風と吹雪にさまたげられ登頂を断念しなければならなかつた。国家的な背景をもつたこの二つの隊の動きをみると、それは明らかに政治的な意図が含まれてゐる。それはいうまでもなくエヴェレストの帰属問題であり、去る四月下旬、周恩来中共首相とコイララ・ネパール首相との会談ではエヴェレストの北側斜面は中共に、南側斜面はネパールに属すると意見の一致をみたが、山頂がいずれに属するかについて話し合いがつかなくあつた。さらにまたネール・インド首相と周恩来中共首相との会談コミニケによると、国境問題については両国の見解の相違を解決するに至らず、そのため両国の事務担当者で会談し、国境問題についての一切の歴史的な文書、記録、地図、その他の資料を検討し報告を作成、両国政府に提出し、さらに話し合いが行われることになつており、エヴェレスト頂上の帰属問題については今回の中共の北側からの登頂とからんで、今後政治問題として紛糾がおこるのではないかと予想される。

クロフォード氏の死

Colin Grant Crawford (1891-1959)

昨夏カラコナムのバトウラ山群でこの英国の偉大な老登山家が遭難死したことは、余り知られていないので、ここにその概要を御報告して同氏の冥福を祈りたい。

昨年の八月十七日ロイター電はケネス・ウォーバートン博士を隊長とする六人の登山隊がバトウラ・ムスタグ（七、七八四米）で遭難し、六人の中ジョン・エドワーズを除く五人が行方不明になつたことを報じたが、その後数回にわたる搜索も空しく、遭難死が確認された。そしてこの直後に、遭難者の中に有名なC・G・クロフォード氏が含まれてゐることがロンドンで公表された。

C・G・クロフォード氏は一九一四—一九三〇年に至る間 Indian Civil Service のスタッフ・メンバーとして印度にあり、その間一九二二年にはエヴェレスト隊に参加しノース・コル直下の大雪崩に遭遇して生還した中の一人で、その後の一九三三年にも四十二才でアトバンス・パーティのリーダーとしてエヴェレストで活躍していた。三十年前のエヴェレスト行をしのんで、最後のヒマラヤ行に参加しての出来事であり、今更ながらヒマラヤの厳しさを認識させられたような気がする。恐らくヒマラヤ遭難者の中で最年長者であると思われる（ヒマラヤン・クラブ副会長のC・E・J・クロフォード氏は別人である）

（松田）

稜線へあと十米、突然土肥隊員がスリップ。あつという間もなく

稜線へあと十米、突然土肥隊員がスリップ。あつという間もなくロープの先にいた藤田隊員がさかさまにひきずりおとされた。二人がひとかたまりになつて落ちる。この氷の壁は千米下までも落ちこんでいる。四人一緒に氷河にたたきつけられるかなと瞬間頭にひらめく。とつさに身体を反転。ピッケルを斜面に突き立てた。二人の行方を見るととまつてゐる。氷壁にへたばりつくようにとまつてゐる。私より先に三番目にいた三室がピッケルを身体ごと氷壁にぶちつけるようにとめていたのだ。四人とも氷にへたばりついたまゝ、大きなため息をつく。土肥、藤田は十五米も落ちた。動くにも動かれぬ氷の壁、そのうちスリップのショックから恐怖心がおこつたのか、手足にふるへがきた。青い氷壁にはりついたまゝ、ニッチもサッチもいかなくなつてしまつた。寒さはいまますます激しくなる。こうして入れたらごえ死ぬばかりだ。一息入れて行動をおこそうとしたが、みんな自分の身体をささえているだけでせい一ぱい。とくに土肥はスリップしたままの体勢で身体をちよつと動かしただけでスリップしよつた。下ることは余計困難だ。アイスピトンを打つて進むことにする。デナリの登りで全部使いはたし残るはあと一本。打ちこもうとしても氷が堅くてはいらない。二、三回打つているうちにピトロンが落ちた。カラカラと音を立てて落下し、たよるのはピッケルだけとなる。

足場を切つたが腕に力がなく危くて登れない。少しずつじわじわ

はれてきた。

やがて第三キャンプのローソクの明りがみえ、ほどなく鈴木、高木兩隊員が迎えてくれた。六日午前零時三十分第三キャンプ帰着。

心ずくしの暖かみルックをのみはじめたら、しみじみ極北の頂上に登頂したのだという実感がわいた。(昭和三十五年五月九日読売新聞より)

▼明大隊行動概要

四月五日 全員アンカレジ到着

四月七日 マッキンレー山麓タルキートナ入り

四月九日 カルヒトナ氷河上に器材空輸開始

四月十二日 カルヒトナ氷河上二七〇〇米の地点にベース・キャンプを建設

四月十四日 カルヒトナ氷河最上部三三〇〇米にCⅠを建設、その後ブリザートのため九日間停滞

四月二十八日 西山稜ウィンデイ・コーナリ四〇〇〇米にCⅡを建設

五月四日 四七〇〇米にCⅢを建設

五月五日 藤田、高橋、三室、土肥の四名CⅢよりマッキンレー(六一九一米主峰(南峰))に登頂

五月十三日 高橋、小林CⅢよりマッキンレー北峰に登頂

五月十四日 高橋、金沢、東、三室、土肥、松田、小林再びマッキンレー主峰に登頂、高橋、小林の二隊員は頂上に二人用テントを張り一泊

五月十六日 全員CⅢに下山

明大登山隊帰国 交野隊長以下六名は六月八日午前九時三十五分羽田着PAA機で帰国した。

吉阪隆生

五月一日 飛行機で寺谷 山本
入山。

五月四日 吹雪 全員で終一〇
〇〇呎上に荷上げ
五月五日 快晴、吉阪、今村は
C I建設、他は荷上げしてベース
キャンプに戻る

七月七日 晴、鬼頭、寺谷、今村、山本はCⅡの荷上げ、他はベース・キャンプからCⅡへ荷上げ

五月八日 快晴雲海、今村、山本、寺谷はCⅠに、他はCⅡに入る。CⅠから南稜を攻撃予定だった。

たので、これで準備態勢はととのつた形である。

五月九日 吹雪後快晴、C II からC Iへ荷上げ、C IIは風のため動けず。

ら今村、鬼頭、山本が南樓取つきまで行つたが、山本が吹きとばされてスリップしたため途中から下山。この山の風の強さを知らされる。

五月十一日 降雪、菊島、寺谷はCⅡを増強し、吉阪、山本は西尾根から支援用キャンプ設定に出る。この日今村、鬼頭は一七〇〇〇呎まで試登する。

五月十三日 晴 吉阪、山本は西のバットレスを明大と同じルートに沿つて登つたが、ガスのため最高点に至らず下山。CⅡでは寺谷、菊島が昨日今村、鬼頭の登つたと、この日まで荷上げ。

五月十四日 吉阪、山本で張つたCⅢが風のため吹き飛ばされ夜半に帰幕したら見当らず、下に張つてあつた明大のテントに入れてもらふ。

この朝午前六時CⅡを出た寺谷、今村、鬼頭、菊島の四名は南樓を攻撃、青木の悪場困苦を一つつ午後九時半一九〇〇〇呎地点でビバーク。夜に入り風強く、寒気きびしい。

五月十五日 午前六時より四名は登攀を続行、ついに南壁の新ルートを完登し午前七時半主稜線に立つことが出来た。西尾根の一般ルートを下り、午後三時CⅡに帰着した。

五月十六日 吹きとばされたテントを探し出してから全員CⅠに集る。

五月十七日 全員ベース・キャンプへ下山。

十四日夜のビバークの時指先、耳などに少しばかり凍傷を受けた者もいましたが大したことはなく普元氣です。明大の方も五月五日

に第一回の登頂、五月十四日に残りの大部分が登頂して十六日に下山したので、昨夜はベース・キャンプで早明合同コンパの宴をはりました。一〇二〇呎の水面上でこういうことの出来たのは日本山岳会をはじめて以来のことでしょう。われわれがこの登山を行つている間にアンカレッジのアラスカ隊、シェーニングラのシャトル隊など続々登つてきました。われわれを除いては皆同じ一般ルートたつた西バットレスを通つていますが、それぞれ山の登り方が違い面白い対象です。評するならば明大のは戦艦の如く、重装備でノックシノッシと進めている。われわれのは潜水艦のようにギリギリにきりつめたものでもぐつたりひよつこり出る。シェーニング隊は巡洋艦のように早く(彼等は十日の休暇を利用して)の荷物を飛行機でかなり高いところへ落下させたりして時をかせいでいます)アラスカ隊は掃海艇が何かのように、こまかくチヨコチヨコとテントを持ち歩いて進めています。もう一隊カナダ隊で来るそうです。いまベース・キャンプは雪です。飛行機が来られるよう早く晴れることを祈りつつテントの中で過しています。皆様によろしく。

(五月十八日BCにて)

海外だより

▼ダウラギリ登頂 スイスのマックス・アイゼリン氏を隊長とする十一名の国際登山隊は五月十三日

海外だより

未踏峰最高のダウラギリ第一峰（八・一七二米）登頂に成功した。一行はベース・キャンプまで器材を空輸する飛行機の不着着など、事故にあつたが、五月四日第一回頂上攻撃を行つた。これはブリザードのため失敗、五月十三日高度七八〇〇米のキャンプから好天に恵まれて第二回の攻撃を続行、岩と氷の垂直に近いけわしい登行に酸素を用いず四名の隊員が登頂に成功した。登頂メンバーはシェルパ二名を含む六名。なお五月二十三日H・ウェーバーとM・パウヒャーの二名が七六〇〇米のCVから酸素なしでCVIを通過し第二登に成功した。

なおアイゼリン隊長は最新の高度計で測つたところダウラギリ第一峰の標高は二六九七五呎（八二二二米）あつたと発表した。この標高は昨年のオーストリア隊の測定したものと一致し、その結果ダウラギリはエヴェレスト、K2、カンチエンジュンガ、ローツェ、マカルーにつき世界第六位の高峰になると五月三十日カトマンズ発のUPII電はつたえている。

▼アンナプルナ第二峰登頂 J・ロバーツ大佐を隊長とするイギリス人、ネパール合同登山隊は五月十七日午後四時三名の隊員がアンナプルナ第二峰（七九三七米）初登頂に成功した。北面から第四峰を経て登頂したものともみられている。

▼アビ峰登頂 津田康祐氏を隊長とする同志社大学ヒマラヤ登山隊は二回にわたる未踏峰のアビ峰（七・二三二米）初登頂に成功した。第一回登頂は平林克敏副隊長とサ

ーダーのガルトゥエンによつて五月十日午前十一時四十八分に行われ、翌五月十一日には津田隊長と寺坂元雄両隊員がそれぞれ頂上をきわめた。好天に恵まれ予定より十日早く三人出来た。ルートは一九五四年三人の犠牲者を出したイタリア隊と同じルートをとつた。
 ▼ヒマルチュリ登頂 山田二郎氏を隊長とする慶大ヒマラヤ登山隊は五月二十四日午後一時十分田辺寿、原田雅弘両隊員がヒマルチュリ（七八四四米）登頂に成功。つづいて翌五月二十五日午後二時十分宮下秀樹、中沢公正両隊員が第二回登頂に成功した。一行は四月十八日ムシ・コラのベース・キャンプより行動を開始し、五月三日高所用ポーター一名が雪塊に当つて死亡するアクシデントにあつたが、標高約七千メートルのウエスト・ピークをこえ登頂に成功したもの。
 ▼ガルツェン・ピーク登頂 伊藤久行氏を隊長とする東海連盟ヒマラヤ登山隊はジュガル・ヒマールに入り、五月五日ガルトゥエン・ピーク（六七〇〇米）の第二登に成功、五月七日は約六八〇〇米の無名峰に登つた。目的としたビッグ・ホワイト・ピーク（七〇八三米）は悪天候のため断念した。
 ▼K2へ国際隊 ウィリアム・ハツケット米国陸軍少佐を隊長とするアメリカ、ドイツ、パキスタン人の七人で編成された国際登山隊はK2（八六一一米）第二登をねらひ五月二十九日カラチよりスカルドに向け出発した。七月下旬登頂の予定である。
 ▼パミール学術調査隊 京大士

酒戸弥二郎静岡大教授と副隊長吉井京大助教授は五月二十八日羽田発印度航空機で出発、両氏は先発の四隊員と六月二日カラチで合流しアフガニスタンを経てパミール高度の動植物、地質などを調査しノシャック山（七四九〇米）にも登頂を試み九月下旬帰国する。

▼アムネマチン登頂 北京地質学院の登山隊に六月二日青海省の未踏峰アムネマチン（積石山 七一〇〇米）の初登頂に成功したと六月四日西安発の中華社電報は伝えている。中国の大学教師と学生だけの登山隊が七千米以上の山に登ったのははじめてだといわれている。同登山隊は助教授、学生等十一名からなり五月二十日山麓に到着、四八〇〇米にベース・キャンプを建設、東斜面を六千米まで登ったが幅五、六米の岩の割れ目にはばまれて後退、北斜面の新ルートから六月二日北時間午後一時二十分パイ・チンシャオ隊長以下八名が頂上をきわめた。なおこの山についてに会報一七九号一八七号に吉沢一郎氏がくわしくクラーク大佐の報告を紹介しているの（山崎）で参照されたい。（山崎）

アピ登山隊通信

いまアピ・コーラの入口にテントを張っております。お蔭様でとうとうアピの山麓に到着できました。カルカッタに上陸してから鉄道でタナカプール、ここからバスでピトラガールまでは全く順調にうまくなりました。カルカッタの通関も紹介していたバルワラ氏の努力で想像以上に早く、しかも

安くいきました。

隊の構成は隊員五名、リエゾン一名、シエルパはダージンよりサーダーのガルツェン、ラクパ・ゲルブ、ローカル・シエルパとしてバサンダ・ノルブの二名、ネパールのヒマラヤン・ソサエティよりアイラ・テンジン、ダワ・テンジン、シエルパ・テンジンの三名合計してシエルパは七名です。

ピトラガールからアスコットを経てカリ河のインド側を通るルートとはインナー・ラインの問題でなかなか上手くいかず、この許可を

もううために一週間程、連日ガバナリーの所へ出かけて交渉しました。ガナリーがウチをきまませんでした。止むがなく隊員五名とシェルバ三名、クエーリー一名の隊はネパール側を強行し、荷物の方はガルツェンが率領してインド側を通るといふ変則的のキャラバンをとらざるを得なくなり、四月九日二隊に分かれて出発しました。ダルチュウらについて翌日（四月十四日）ようやくインナー・ライン許可がおりましたので、ここでキャラバンは合流、ガレピオンまでインド側を通りま

た。この間ダルチュールからはインド政府のスペシヤル・リエゾンオフィサーが同行し、トルガン・ガルビヤンの近くでは国境警備隊の護衛をうけたりしましたが、ともかく無事アビ・コールの入口に達することができたわけです。

今日隊長以下偵察隊がBCまで偵察にいつてきました。ギリヨネ隊のBC（三五〇〇米。附近はよみが雪が残っていて、イタリア隊までの雪の下にあるようです。一応、しも雪の下には全員でイタリアー隊

と同じ位置にB・Cを設致致す予定
です。ガルツェンの話によれば、
アビの雪のつき具合は想像以上に
多いようです。これから先もガル
ツェンにいろいろな教えられながら
登るつもりです、われわれの隊に
ガルツェンが参加してくれたことは
何よりも幸いなことでした。こ
の偉大なサードリーなことで、今
回とまた変則的キャラバンなども
不可能であつたと思います。

アビは想像していたよりも遙か
に大きな山ですができるだけやつ
てみるつもりです。

會、弥彦神社、国定公園弥彦地区
觀光連盟の共催で五月十五日、同
處において盛大な除幕式が挙行さ
れた。当日は翁の夷吏で当主であ
れた高頭当五郎氏を初め関係者多
数が列席し、また生前、翁と御親
交のあつた冠松次郎先生も快く御
招待に応じられて遠路のところ御
足労を戴いた。

生憎の曇天で下界も望めず、日
本海岸から屹立した六〇〇米の山
頂は、山岳協会旗もチ切れるばか
りの強風が吹き渡つていたが、神
武による壮嚴な式典は滞りなく終

— 106 —

— 106 —

— 106 —

弥彦山頂にあつた高頭さんの像が、弥彦山と十宝山との間にある大平に移築された。その除幕式に招かれて、五月十四日新潟につき、十五日弥彦山に向つた。

いうのだが、生憎の霧で何処も見えなかつた。

頂上には奥社の周りにテレビ塔が二基、その他に無線中継所や観測所などが建てられてある。高頭

れた、東京では二度お会したがそれからもう二十年位たった。久
嶋も甚だしいもので、余生の健康
を祈念して、一行の人たちと長岡
へ帰り、三日間の歓待の御礼を述

ラの件、ガルツェンの件その他すべてが日本山岳会の方々の御厚意ある御支援の賜だと思えば、今の地にある私達は非常な幸運に恵まれた隊だと自負致さざるを得ま

村長、藤島県山岳協会長等の各氏から挨拶があつた。就中、冠先生の翁を偲ぶ幾つかのお話は参列者一同に深い感銘を与えるものがあった。そしてこれらの状景はテレ

飛躍的な変革を遂げ、かつては急登一時間を経た山頂上も、ロープウェイを利用すれば五分間の空中散歩でわがものになるという有様で、これには地下の高頭翁も定めし温顔をほころばせて感懐を深めておられることであろう。



会 員 通 信

暑寒別岳に登る

古 沢 肇

北海道の天塩と石狩の国境にある暑寒別岳(一、四九一米)に登ってみました。登山口は日本海岸の増毛です。最初は鯉の来なくなくたきぎれた漁場を想像してやってきましたが、この辺での屈指の海水浴場ということ、町の賑やかなのに驚きました。うっかり宿もとりはぐれるところを増毛山岳会の高島繁氏のお世話で駅前に一泊。留萌林務署の登山票というのを貰って山麓の山ノ神へ向いました。山ノ神は戸数八戸、電灯はありません。天候はつきりしないので(この辺りは極めて変り易いのですが)部落で泊めて貰いました。

八月一日、いい具合に天気らしいので頂上に向いました。山ノ神から頂上まで十五K道は三角点、四七六米、一、〇七五米の尾根に柱があり、手入れがよくしてあります。七月の山開きに町で手入をするのだそうです。驚いたのは、頂上まで道がほとんど真直ぐで一本道であることです。もつというなら海岸の増毛から一本道といった方がいいかも知れません。こんなところにも北海道の山の雄大さというか原始性が窺えるように思われました。蛇の多いのにも驚きました。猛烈な集中攻撃を受けて五合目まで一休みもせず登りつづきました。五合目からはさすがに少なくなりましたが、こんどは蚊とブヨに攻められ無風のためか頂上まで蚊につきまといまわりました。

もしこんな山で眺望がなかったら本当に詰らなかつたでしようが、幸い展望にめぐまれ、北は天売、焼尻の二島と、利尻島が望まれ、南は石狩湾を挟んで積丹半島の全容が見えて満足しました。また麓の山ノ神から暑寒別川の奥に見えた浜益岳(一、二五七米)はここからはもうすぐ近くに聳えていて群別岳とともに険悪な谷と尾根とに隔てられて見えます。それからこの山のもう一つの登山口の滝川方面への踏跡が、南暑寒別岳を経てえぐんと続いているのが見えます。途中の雨竜沼というのは地図の上では大きい沼ですが、ここから見るに広い湿原に小さな池塘が点在しているようです。なんでも熊の巣だということでした。

帰路はまた往路をてくく下りましたが、下りながらつくつく考えました。この山の記録は積雪期のおぼろげかりであつたことを、なるほどスキーには持つて来い。春の快晴にこの長い尾根を短スキーでも走らせたら、本当に日本海に飛び込む思いがするかも知れない。いま時、日蔭もないこんな山にやつてくるのは内地からきた物好き位のものだろうなどと思つて可笑しくなりました。二合目までくると下から登つてきた数人の一行に会いましたが、土地の人らしく、頂上で泊りたいが水はあるかとのこと。一合目(避難小舎あり)の外、水は無いというところの(西暑寒別岳の残雪を指して)雪は取りに行けないだろうかと問われるので、とても無理だと答えると困つた様子でした。その夜また天気が悪くなつたので難儀されたことと思つています。

(付記)

この登山のあと、増毛から浜益まで西海岸を通つてみた。五万分局の増毛山路、雄冬山路は今通る人もいないとのことだったが、幸い便船を得て海上から眺めることができた。陸の孤島とも云うべき雄冬海岸の豪快さは目を見はらせられたし、千代志別から浜益の幌へ越す小さな峠で見た日本海の落日の美しさは今に忘れかねている。(三四、八、一〇)

屋久島遊記

日高 信六郎

ひと月に三十五日も雨がふり、風がふくと一週間ぐらいの船まちを覚悟で出かけると聞かされてい

た上に、十年ぐらいの約束で案内役を引きうけて下さつた加藤数功さんの同行が、出発まぎわになつてむつきしなくなり、心ぼそくなつたが、何しろ五十年來の念願でもあり、思い切つて出かけることにした。東京駅のプラットフォームで出くわした眞さんから、山では雨ですと、肩を叩いてニヤリとされ、車中のラジオは台風が沖縄に近づくことと報じる仕末で、またシュンとなつたが、福岡から会員の折元秀穂さんが助太刀のり込まれ、夕方鹿児島につくと、船は明朝出るとのこと、おまけに会員の雨宮教授のお世話で、屋久の山歴が加つたので、すっかりいゝ氣になつて船出したのは昨年十一月十四日。快晴の船旅は快適を極めた。外洋に出ると、南の海は深みどりに、ゆるく大きくうねつてい

翌朝安房につき、営林署の自動車に便乗して小杉谷に入った。山はけわしく、谷は深くて水は清く亜熱帯の叢林をわけて登るトロの上から眺める景色は眼をよろこばせるが、この春から始まつた発電工事はほとんど進んで、千尋滝のそばにある小さな発電所の下手には、支流の荒川から千米のトンネルを穿つて、二百五十米の落差をもつ一万二千キロワットの発電所の建設がすすみ、今春には出来あがるという。六百人ばかりの人が入り込んで、営林署の軌道も半分以上は資材の運搬に使われ(登山者の便乗は近來たいへんやかましくなつた)安房の町は眼にみえて開け、旅館やバーやシナめし屋

などが、粧も新たに現われ、北岸の一湊には耐火煉瓦工場が建設中で、防波堤工事がすすみ、東北岸には飛行場がいま整備されている。ここ数年のうちに、全島に著しい変貌が見られることであろう。山を下りてから、わたくしはまだ間にあつた、いま来てほんとによかつた自分に云いきかせた。伐採はますます盛になつて、軌道は小杉谷から奥さらに十軒ばかり延び、機械鋸や、谷を跨ぐ長大なケーブルを使つて、巨材がドシドシ切り出されているところは眼を覆わせるものがある。終点から花之江河まで三・六軒。登るにつれて巨大な原生林と巨岩の世界になつて、やつと氣がせいせいした花之江河の小屋は数年前改築されてシッカリしてはいるが、床が低く湿つたのは惜しい。ここに二泊して、黒味岳の手はじめに、宮ノ浦岳(一九三五米)から永田岳まで往復した。快晴にめぐまれ、森と岩に装われた山々と、その間にいくつも深く切り込んだ放射状の谷を脚下にながめ、島をとりまく雲海のかたに、霧島や開聞など九州本土の山々を指さしているところ、何だか神話時代の国つきりの場面の当人物になつた氣にもなつて、いま立つて見上げる頂が天に近いような錯覚さえ起しうになる。山中であつた生きものは永田岳の頂上から見かけた、われわれと同じ登路をたどる大きな鹿一匹だけと云う静寂境に三日を過して、きんさん楽しい思いをした。下りは南岸の湯泊に向つた。ドシヤ降りの雨にずぶぬれになつ

て、斧の入らぬ密林の苔むす岩をふみ、霧たち迷ううす暗い林道をたどつて、谷から谷へと急崖をまき、やがて急な尾根を千四百米ばかり一気に下る。迷い込むわかれみちもなければ、ひとけもない。途中でたつた一つ見つけたバットの空袋も眠ざわりにならず、一抹のなつかしさをさえ覚えるほどであつた。

尾の間に泊つた宿は一昨年横きん一行が泊まられたところ。ぬれ物を乾かし、野趣あふく温泉につかつた。翌日バスで安房にかえる。雨にけむる南国風物は物めずらしく、車がとまると、一人二人おとりに茂みの中に消えて行く。また台風が近づくというラジオでおどかされたが、結局一日だけの船待ちでんだ。往復とも種子島の西之表に寄港した。仏桑花がさきガジュマルが根をたれる町をうろつき、レストラン「南国」で大角力福岡場所のテレビを見て、長い碇泊の時をつぶした。

図書紹介

ヒマルチュリ

村木 潤次郎著

著者は御存知の通り昨年の本会主催になるヒマルチュリ登山隊の隊長である。本書は隊長の眼からみたヒマルチュリ登山隊の行動の概要を述べたもので、公式の報告書という形式はとっていないが、それだけに肩がこらず、しかも生々しくヒマルチュリ登山の行動をうかがい知ることが出来るのは楽

しい。ヒマルチュリは遠い、ネパール、ヒマラヤへの道、あれがヒマルチュリだ、雪原と氷壁を越えて、最悪の日々、頂上を目指しての六章にわけ、くわしく日々の動きをしるし、最後に頂上攻撃、時間切れで下山という松田隊員の手記のせられてそのクライマックスとしている。隊長として進退を決する困難さをもよく述べつくされており、その間たゞまざるユーモアをもつて最後まで読者をひきつける点など、この種の書物では最近の白眉といえよう。巻末に登山日誌がええられてあるのも親切である。

昭和三十四年十二月毎日新聞社発行、カラー写真一、黒白写真三十二枚、B6版二〇九頁定価二八〇円

ヒマルチュリ日記

石坂 昭二郎著

著者も村木君と同様山岳会にはぬきのヒマラヤのベテラン。これも一隊員として昨年のヒマルチュリ登山の日誌集である。ヒマラヤへ行けるか、以下十一章にわかれ、赤裸々にその行動がつかえられてゐる。いたるところに出てくるネパール語の会話や、現地民との交歓、特に女性とのそれなどは、はじめにヒマラヤ入りをした者などにはとても書きこなせないニュアンスをもあけており、それが本書の大きな特色といえるだろう。村木君の本とあわせて読めばまず、昨年のヒマルチュリ隊の動きはあますところなくうかがえるといえよう。「ヒマラヤ」というものは夢に思ひえがいたり、ただ眺

めていれば美しいすばらしいだけですむが、そのふところにはいり頂に登るということは恐ろしく大変なことである」と著者はそのあとがきで述べている。

昭和三十四年十二月ベースボール・マガジン社発行、B6版、カラー写真一、口絵、黒白写真二十一枚、附図一枚、二九〇円

山に帰る

慶大体育会山岳部編

昭和三十三年十二月北アルプス中岳において登山中板状雪崩のため慶大山岳部員四名の犠牲者を出したが、本書はその中の一人、平塚泰一郎君の遭難追悼号である。四章にわかれ、第一章では横谷恒、谷口現吉、山田二郎の三先輩がそれぞれ追悼の言葉を述べ、第二章は故人の山歴と登高記、第三章は遺稿と手紙、第四章は友人と家族の思い出の記がのせられてゐる。もとより正式の遭難報告書ではないので、遭難概況についてはごく簡単に記されているだけだが、谷口、山田両氏の記事の中にその原因が適確にふれられてゐる。口絵の写真も美しく、故人をしのぶに足り、最近出たこの種のものとしては出色のものである。とはいつても、遭難というものは何としても避けなければならぬ追悼記も出来るだけ少くすることがその本筋ではあろうか。佐藤久一朗氏の手になる扉とカットは何時ながたなくみにそのムードをとらえている。

昭和三十四年十二月慶応義塾山岳部発行、口絵カラー写真三枚

一九四頁、非売品。

北大山岳部々報八号

北大体育会山岳部編

戦後復刊第一号である。第七号が発行されたのが昭和十六年二月だから十八年ぶりの発行ということになる。主な内容は厳冬の高山脈全山縦走、冬の十勝岳、大雪山縦走、積雪期の日高山脈、夏の紀行、追悼、物故者略歴、年報

り、本号においてそのホーム・グラウンドである積雪期における日高山脈の山がますますところなく登りつくされてゐることを知ることが出来る。かつて「山岳」にも発表された厳冬のベテガリ岳初登攀の報告もついている。北海道の山々に対して知識の少ない私どもにとつて、欲をいえば、これらの登山報告をもつてしる要領よく整理し、年度ごとの紀行という形ではなく、積雪期における日高山脈を中心とした北海道の冬山の概念をまとめためたであらう。また北海道の山を高めたい。ヒマラヤまで出かける。口絵の何人かの先輩の言葉もほしかつたような気がする。極地研究グループによる大そりの研究に関する報告は特に興味深く読んだ。

昭和三十四年十一月北大山岳部発行、三七頁、写真六枚、附図四枚、頒価五百円

(以上山崎安治)

続・山と書物

小林 義正著

昭和三十二年七月に出た本書の正篇を一読したとき山の本が好き

だといつても、この著者のように徹底できる人はまことに幸いであり、いくら広い日本のなかでも到底他には求められまいと痛感したのでつた。このたびその続編が出るに及んで、その感じはなお一層深いものがある。著者の対象とする山岳図書は、例えばヒマラヤとか、或いは日本の山の本とか、一方に片よつてゐない。およそ山の本と名のつくものはい、漏らすことなく古今東西にわたつてゐる。

本書の前半に収められたものは「竹取物語について」「往来物から眺めた山」など五篇のどちらかといへば研究考証物であつて、こういう方面で教えられる所の多いのは私ばかりではあるまい。これらが多忙な会社員生活の余暇になされたことを思うとき、誰しも敬意を表しないわけにはゆかぬであらう。

次に大正年代及び昭和前期の山岳文献が詳細に述べられた二篇がつづく。また「欲しい山の書物」として日本登山史、山岳関係文献所在目録、小島鳥全集、新版日本名山図譜の四つを挙げられてゐるが、これは全く私も同感である。出来れば完璧な「山岳事典」をこれに加えたらどうであらう。「登山と探検の洋書輸入誌」は正篇の「初期の『学鑑』」から眺めた山の洋書輸入誌」の続編であり、丸善に多年勤められた著者にして初めてなした興味深い一文と思う。この他にも山の好きには見逃せない随想が多い。最後に正統篇合せた総索引が二二頁にわたつて付けられているのも親切で、本書の価値を一段と高めている。

装幀、多数挿入された図版など
正篇同様申し分なく、殊に写真に
は珍らしいものも少くない。たゞ
誤植がやゝ目につくことは、この
ような本のために特に惜しむ。
A5版四二〇頁 昭和三十五年
三月、築地書館発行 千三百円
(望月達夫)

越後の山旅

—下越地方編—

藤島玄 著

何年か前の或る秋のこと、土樽
で登山講習会が開かれたことがあ
った。私は自分の話した内容もよ
くおぼえていないほどの古い話で
あるが、このとき講師の一人とし
て出席された藤島玄さんの講話の
印象は今でも鮮かである。内容は
越後の登山の特質といったもので
あった。私はそのときまで、失礼
ながら藤島さんを単なる登山界の
名士の一人だくらいに考えていた
のであるが、その講演によつて私
は、氏が本物の登山者であることを
知り、また越後の山への愛情、
観察の深さなど、二、三十分の講
話によりまざまざと印象に焼きつ
けられ、ひいては自分も越後の山
々にひかれること切なるものがあ
った。

こうした玄さんが越後の山旅の
案内記をものされた。越後は京都
に近い方から、上越、中越、下越
の三地方に区分されるが、その下
越地方編、雄大な奥深い山々を含
む地方である。上越線の沿線あた
りを中越と考へて、その東北部、
朝日連峰までである。その山登
私は従来味もそつけない山登

りばかりやつて来た人間で、越後
の山はあまり知らない。だからこ
うした著書の紹介には最も適さな
いと思うが、小冊子ながらまこと
に優れた案内記で、山の自然のみ
ならず人文にも詳しく、豊富な古
文献の引用とともに、読みものと
して好適である。

案内記としての本書については
いまさらいうまでもあるまい。越
後の山をホーム・グラウンドとし
て長年打ちこんで来られた著者の
ことである。よく調査された概念
図のみならず、コース断面図にい
たるまで苦心は行きとどいている
また巻末の越後の山の基礎技術
は、いわゆるアルピニズム的な山
登り以外の登山術について、簡に
して要を得た解説である。こうし
たことを知らずにいきなりアルピ
ニズムに入つてしまふ登山者が多
いこのごろであるが、若い人には
是非一読をすすむたい。

会務報告

三月理事会兼評議員会

三十一日(木)

出席者 日高会長、理事渡辺、
浜野、金坂、川上、徳久、田島、
日下田、田村、監事野口、諸岡、
顧問藤木、評議員入沢、成瀬、辻
岩永、東京支部折井

議事

一、体協コーチ会議出席の件報告
(岩永)
一、山形県山岳連盟積雪期登山技

術講習会巡遊講師報告(川上)
一、西穂高積雪期登山技術指導者
講習会の件報告
一、体協団体長会議の件報告
一、日本山岳協会の体協加盟の件
本日体協評議員にて承認
一、新年度役員および評議員候補
者推薦の件

会 員 総 会

昭和三十五年度通常会員総会は
四月二十四日午後二時から体協会
議室で開催。

一、昭和三十五年度事業報告

一、各支部報告、秋田(荒巻)長
後(藤島)関西(津田)東京

(折井)石川(書面)

一、三十四年度決算報告

一、三十五年度予算案、可決

一、役員改選の件

(会長) 日高信六郎(副会長)

松方三郎、三田幸夫(理事) 浜

野正男、折井健一、渡辺公平、

山崎安治、太田敬、金坂一郎、

川上隆、日下田実、古沢肇、高

橋進、田村扇一、徳久球朗、加

藤元一、木下是雄、村木潤次郎

(監事) 松本熊次郎

(評議員) 藤井連平、早川種三

今西錦司、入沢文明、伊藤秀五

郎、交野武一、望月達夫、成瀬

岩雄、小原勝郎、篠田軍治、青

木昇、藤島敏男、深田久弥、橋

本三八、今西寿雄、神谷恭、織

内信彦、および東京を除く各支

部長と決定

一、定款変更の件

第六条入会金五百円を二千元と

変更(ただし五月一日より実施)

第七条「入会金と年会費をそえ
会員二名の紹介」を「会員二名
(内一名は役員または評議員た
ること)の紹介」と変更、第十
三条評議員の定員十五名以上二
十名以内を三十名以上四十名以
内と変更する。
訂正 会報前号海外登山審議委
員会規約中「比較審査」とある
を「審査」と訂正します。

昭和卅四年度収支決算

(35・3・31)

収入の部 (単位円)

科目 予算金額 決算金額

經常収入 100,000 133,700

入会金 20,000 26,000

会費 100,000 97,700

旧会費 10,000 12,000

次年度会費 5,000 8,000

事業収益 5,000 8,000

会報広告料 3,000 3,000

山岳広告料 14,000 19,000

山日記勘定 25,000 27,500

会員章売上 5,000 8,000

山岳売上金 15,000 28,000

利息 2,000 3,500

雑収入 15,000 24,000

寄附金 1,000 2,000

貸室料 1,000 2,000

貸補助金 1,000 2,000

計 173,000 210,600

支出の部 (単位円)

科目 予算金額 決算金額

事務費 75,000 75,000

俸給 30,000 31,000

印刷費 35,000 35,000

文具費 3,000 3,000

通信費 26,000 27,000

交通費 10,000 13,000
管理費 11,000 13,000
火災保険料 17,000 17,000
諸費 8,000 8,000
諸税組合費 2,000 2,000
光熱費 4,000 4,000
電話料 4,000 4,000
事業費 77,000 77,000
会議費 10,000 10,000
交際費 4,000 4,000
図書費 15,000 15,000
会報出版費 10,000 10,000
山岳出版費 25,000 25,000
調査研究費 20,000 20,000
備品費 25,000 25,000
指導費 20,000 20,000
予備費 20,000 20,000
雑費 20,000 20,000
振替手数料 20,000 20,000
山日記編集費 20,000 20,000
計 210,000 210,000

剰余金 17,000 17,000
合計 35,311 35,311
財産目録 (単位円)
基本財産 100,000
貸付財産 66,500
運用財産 25,000
建物 64,000
什器備品 26,300
図書 26,300
銀行預金 69,000
貸付信託 74,000
金銭信託 74,000
振替貯金 52,000
現金 18,000
計 275,400
基金 18,000
遭難対策基金 51,000
図書基金 10,000

図書室基金

一〇一、〇〇〇
計 一六二、八二五

社団法人日本山岳会、昭和三十四年度収支決算書および財産目録につき監査致しましたところその正確なることを認承致します。
昭和三十五年三月三十一日
会計監事 諸岡 一次
同 野口 末延

五月役員総会 十二日(木)

出席者日高会長、三田副会長、理事、徳久、田村、金坂、村木山崎、古沢、渡辺、川上、加藤評議員、青木、神谷、織内、深田、中田、監事野口、松本

▼議事

一、役員業務分担は次の如く決定企画(支部、協会、遭対) 浜野総務(庶務、記録) 折井、川上海外連絡金坂、経理太田、集会高橋、編集(会報、山岳、山日記) 渡辺、古沢、加藤、図書徳久、海外登山村木、指導山崎、日下田、研究木下、田村、なお常務理事は浜野、太田、折井、金坂、渡辺、山崎の六名
一、大阪市大ランタン・リルン登山の件、山岳会推薦と決定

福岡県山岳連盟

登山技術講習会

四月三十日―五月六日の一週間剣立山周辺において福岡県山岳連盟の主催により遭難予防を目的として第三回積雪期登山技術講習会が行われた。講習委員長には橋本評議員、上級班たるA班には金坂理事が講師として招かれ、ほかにA班講師として会員折元秀穂、宮

本忠、田中和昭、印口宗男の諸氏が参加され、受講者は講習補助員五名を含めて二十一名、総参加者七十三名の盛会であった。

A班は剣山荘、B班は房治の湯に合宿、A班は五月一日(快晴)午前中剣山荘に到着、午後より基本技術の講習開始。
二日は降雪により午前中で切りあげてスキー練習。
三日(晴後曇)は終日アンザイレインして剣御前経由富士の折立往復。

四日(曇時々晴)は別山尾根を経て剣登頂、長次郎谷下降。帰路剣沢にて練習のためアンザイレインしたほか網は一切使わなかった。
五日は午前中スキー練習、午後房治の湯に集結、六日下山。

期間中に行き会った登山者はすべてアイゼンを足につけていたが、この季節の湿つたザラメ雪に最も快適なのはゴム長であろう。その意味ではオーヴァーシューズに足をかためた物々しい装備は或る程度ゴム長の効果をねらったものであろうか。われわれは多少アマノジャクかも知れないが、終始アイゼンをはかないでルックサックにしまこんでいた。というのは、足もとのしつかりしていない人にアイゼンをはかせると、気狂いに刃物を持たせたような効果を生じやすいし、また雪の歩き方がしつかりした人ならば、ことさらにアイゼンの使い方を教えることも、自然にアイゼン技術をマスターして行くからである。登山中部分的には青氷やひどい急斜面の下降がなかったわけではないが、漸進的トレーニングによって、参加

者の歩き方にはほとんど不安を感じず、剣登頂にはザイルを使用しなくてはといった不安は感じられなかった。

綱による確保については、氷の急斜面を落ちるトップの確保練習の機会には得られなかったが、この季節の雪に関しては、どんな意地悪な引張り方をしても確保者が転げおちるようなことはなかった。

合宿中幸か不幸かなりの降雪に見舞われたので、雪崩判断についてはかなり具体的な判断力をつけることができた。

要するに登山技術の講習会としては、かなりの成果を挙げえたように思う。予定の課目と与えられた条件の下に、目的は一応達成された。これは参加各講師の優れた技術のみならず、主任講師の意図を諒とされ、全員ひとつ心になつて指導された結果であると思う。

この講習会を本会主催の西穂高における指導者講習会と比較して見ると、筋肉的なトレーニングに重点がおかれ、結果から見てもその意味の成果はすつと大きかつた。県単位の岳連としては、こうした行き方も結構であろう。別の問題については帰郷後研修することもできるものである。今回あたり問題にされなかつた登山の一般的な教養―山の見方、考え方、判断、チームワークなどについて、は、学課のみに終ることなく、機会をつつかんで一層研修されんことを強く望みたい。

展を期待したい。(金坂)

信濃支部報告

昭和三十四年度事業報告

五月二日―五日穂高岳登山技術訓練
五月六日―八日、第十三回ウエ

ストン祭、一般参加二五〇名
五月十三日―二十四日、岳沢にて北アルプス山岳救助隊員に対し遭難救助訓練

七月二十八日―八月八日北九州青稜山脈縦走隊に参加
八月二十一日―二十三日、戸隠山西岳コースで国体長野県予選、参加選手七十一名

十月二十五日―三十日東京国体参加
十一月二十一日―二十四日富士山で第二回氷雪技術訓練、支部員二十名参加

二月六日―九日、白馬岳で雪中露営訓練十五名参加
三月十九日―二十五日日本山岳会主催西穂高登山技術指導者講習会、本部に協力、支部長以下七名参加

三十五年度役員、支部長高山忠四朗、副支部長清水信朗、古原和美、常任委員百瀬孝、塚本茂樹、百瀬一茂、青柳安照、井口謙司、内川広子、遠藤好一、小里頼忠、監事塚田孝治、伊藤博夫

石川支部報告
会員の数は依然として多くなく、ただ支部委員という資格で多数の新人を擁しており、金沢大学山岳部の正常な発展が一番期待されている。石川県下の岳人は能登地区が全くブランク状態、加賀地区で

もういゆる岳連が出来ないので体協では今まで通り支部の名前で仕事をにつけていく(池田知幸)

日本山岳協会発会式

五月十八日午後一時より体協会議室において、四月一日付発足した日本山岳協会の発会式が行われた。体協から山辺理事、竹田主事の御出席を得、出席役員としては日高、尾関副会長、浜野、高橋両専務理事、金坂、中田、星野、鎌田、大石、武内、松長各理事の十一名。折から日本岳連の登山大会の直後で、多数の地方参会者があつた。副会長長その他の挨拶の後乾杯して式を閉じた。

▼マナスル登頂四周年記念の集い
昭和三十五年五月八日、九日の両日箱根中強嶺 毎日新聞社箱根山荘で横、三田、小原、今西辰昭、依田、村木、大塚、徳永松田、日下田、古市、宝田十三名参加して開いた。

早いもので今年はマナスル登頂四周年を迎えることになった。幸にして今年は第三次マナスルの全員が集れるというので、思いきつて会場を箱根の山に移し盛大に行うことにした。

新緑に燃える箱根の山での集りは結果的には、バラサップを吊し上げる会になつてしまったようだが、當時をしのび、将来のヒラヤを語り、久しぶりに愉快な集りであつた(松田雄一)

▼ニマ・テンジン一周忌法要
五月四日は昨年ヒマラルチュウ第二キャンプで病死したニマ・テンジン一周忌にあたるので在京のヒマラルチュウ隊員が集まり、ニマの生

前の活躍を偲んで法要を行つた。

▼ネパール国王の来朝 ヒマラヤ遠征隊に御縁のふかい、ネパールのマヘンドラ国王は皇后と第二皇子その他随員と共に四月十八日から二十五日まで本邦に滞在された、本会からは日高会長が羽田飛行場に出迎えお見送りをし、二十日岸首相主催の晩餐会にも迎られた。席上首相の挨拶は日本の登山隊に対するネパール側の歓待と援助を感謝し、国王の答辞も日本隊のことに言及され、食後首相の紹介により日高会長から謝辞を申述べたところ、国王から隊員の態度などについて好意ある御話があった。なお二十五日会長両副会長はカトマンズでお眼にかゝつたことのある横名譽会員、西堀、成瀬、金坂、小原諸会員と共に迎賓館に国王をお訪ねして御挨拶を申し上げ、日本山岳会の小旗と皇子に無線縦の自動車の玩具を献上した

▼マザマ・クラブへブラーグ贈呈

マザマ・クラブ (The Mazamas) は米国のオレゴン州ポートランドにある古いクラブである。マウンド・フォードにあるクラブのロツジが不幸にして、一九五八年十二月に全焼した。この小屋で面白いのは、太平洋岸の各アウトドア・クラブから寄せられた、クラブの名称とマークの入った石で飾られた暖炉である。これもほとんど火災で失われてしまった。

このたび同じ場所に小屋が再建されたについて、今回は木の飾り板 (plaque) を求められたのであるが、本会としては会員佐藤久一郎氏にお願いし桜材で作つて頂いた。高さを八インチにそろえたも

のである。贈呈式は六月二十五日に予定されているが、出席はちよつと困難であるので、外務省の文化課を通じて贈呈をお願いしてある (金坂)

▼ガネッシュ・ヒマール登頂

英国のP・J・ウオーレス氏は五月三十一日ガネッシュ・ヒマール (七四〇六米) にシェルバ二名を伴い登頂に成功した。一九五八年スイスのランペール